

短編篇

映画文学人生論

- 0711) 杜子春 芥川龍之介 (1920)
0721) 檸檬 梶井基次郎 (1925)
0731) 山椒魚 井伏鱒二 (1930)
0741) はしれメロス 太宰治 (1940)
0751) 山月記 中島敦 (1942)

学校教育で教材として使用される短編小説の教育的な目的は何か？

短編小説は一般には原稿用紙で百枚以下のものをいうらしいが、私の感覚では二十枚程度。たとえば次の五篇のような作品をさす。

杜子春	芥川龍之介
はしれメロス	太宰治
檸檬	梶井基次郎
山椒魚	井伏鱒二
山月記	中島敦

いずれも達意の簡潔な文章で書かれ、童話のように面白い。学校教育で教材として使用されたことがある。文章力をつけるための教材としてはよい。しかし、生きていく力を身につけるための教育的効果としてはどんなものだろう。

たとえば、杜子春は、「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と言い、メロスは「私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ」と言う。正直な暮らしや約束を守って信頼に報いることがこの人生では大事だという教訓を生徒に植えつける狙いだろうか。

しかし、芥川には『或る阿呆の一生』、太宰には『人間失格』という人生の絶望的な暗い反面を描いた作品もある。二人とも実人生では自殺したという事実もあわせて考える必要があると思う。



短編篇

映画文学人生論

『山月記』の主人公は、性、狷介で、つまらない仕事に甘んじることができず、ついに虎になつてしまう。『檸檬』の主人公は、肺尖カタルと神経衰弱を病み、背を焼くような借金をして、えたいの知れない不吉な塊に心を始終圧（おさ）えつけられている。頭が出口につかえて、岩屋の外へ出ることができなくなった『山椒魚』は「なんたる失策であることか！」と嘆く。

彼らはどうみても、実社会において期待され、成功しそうな存在とはいえない。うだつがあがらず、脱落しかけている。そんな存在を主人公とした短編小説を教材にした目的は、人間の愚かしさや人生のきびしさを生徒に教えるためだろうか。それともドロップアウトのすすめか？

もしかしたら、彼らは戦前（昭和二十年以前）の修身教育への反動として国語の教科書に登場したのかもしれない。修身で理想的な人物とされたのは楠木正成や二宮金次郎である。

私が受けたのは戦後教育で、楠木正成や二宮金次郎を理想とする教育ではない。『山月記』『檸檬』『山椒魚』の主人公、『杜子春』と『はしれメロス』の作者の心理にはなじんでいる。

それがよかったかどうかはなんともいえない。彼らのような生き方をしると、自分の子供や孫にすすめるわけにもいかないからだ。

この頃や戯作三昧花曇り

芥川龍之介